■三勝半七（九巻）

帝キネ 小阪作品

脚色及監督　中川紫朗氏
撮影者　唐澤弘光氏

＝役割＝

宗岸　嵐璃徳氏
傘屋平左衛門　阪東豐升氏
茜屋半兵衛　市川瓢三氏
其子半七　實川延松氏
妻　お園　松枝鶴子孃
三勝　津守玉枝孃
材木屋源右衛門　市川好之助氏
番頭　善七　嵐橘右衛門氏

（略筋。大阪上鹽町きつての舊家茜屋半兵衛の息子半七は、お園と云ふ妻まであり乍ら、三勝と云ふ美しい藝妓と深い馴染を重ねて居た。半兵衛が材木屋源右衛門から預つた五十兩の金をもつて、半七は三勝と嬉しい逢瀬を重ねて居たが、半七の仕業であるを知つた半兵衛は怒つて半七を勘當した。三勝は半七を引取つて、兄の傘屋平左衛門の家へ世話に成る事にしたが、一年の後二人の仲にはお通と云ふ赤兒さへ出來たお園は父宗岸の爲茜屋から連れ歸されて居たが半兵衛が半七の身を案じて重い病の床に就いて居ると聞き、傘屋の店を訪ねて三勝に逢つて、半七を返して呉れと嘆いたので、三勝は義理に迫つて半七を返さうと約束したが、その晩半七は源右衛門と爭つて、遂に彼の手に掛けた平左衛門は半七と三勝を逃してやつて身替りに役人に捕へられ、半七の父半兵衛も病の床から召捕られた。之を知つた三勝はお通を茜屋へ届け、半七とともに心中して果てた。お園も二人の跡を追つて長堀端に身を投げて死んだ）

脚色者は此れを一篇のロマンスに作り上げる事に努力した。然し其の努力は効果を擧げ得ては居ない。もつと脚色に當つて人情味を强調し、悲しい情痴の世界を描かなくては成らない。單に筋をダラ〳〵と述べて事件を並列しただけでは、如何にして見るものに感銘を與へられやうか。もつと短い尺數にコンデンスして、半七と三勝の戀お園の氣持ち宗岸の心遣ひなどを、明確に出すべきだ。此の映畫を通じては、全然人々の心理が判らない。先づ卷頭に白百合が美しい調色とソフト・フォーカスで撮されて居る。それが二重露出で三勝の舞姿になり、次で櫻が出て、それが多分お園なのだらう、美しい女に變る――それをピンボケにして半七の寢て居る姿にフェードインするあれは一體半七の夢なのか、それとも人物の紹介なのか、私には意味が判らなかつた。殊に最終の心中後三人の靈魂が手を引いて歩いて行く所は、何と云ふ愚劣さだらうと、呆然として終つた。個々のシーンも皆長過ぎる。映畫劇的の脚色でない。人口に膾炙して居る酒屋の段が全々ない。――等々と缺點を數へればいくらでもあるが、さればとて、良い所がないのではない。源右衛門と半七の格鬪（殺された源右衛門の大寫は不快である）、お園が傘屋へ訪ねて來る所、茜屋へお園親子が歸つて來る所、など伸々良い監督振りである。俳優では延松氏が一番光り、松枝鶴子孃のお園もつゝましやかな演技を見せたが、津守玉枝孃は容貌や扮裝の故もあるが同情を起し兼ねる。その他の人々も皆相當の出來。撮影は例の唐澤氏で殆ど完全に近いが、大寫だけにソフトを用ひたのは、それだけでは美しいが全體としての滑らかさを缺く。傘屋の前、合邦の殺し場など出色の撮影振りであつた。總じて中川氏作品は冗長さを省いて、緊張味を增す事に努められたいと望んで置く。

（四月二十四日、大阪映畫倶樂部）―田村幸彦―